

# 水の流れる高さ

—また、交わる川—

石田 裕子

地理学を学んだ方たちに、このような標題の文章を提示すると、「いまさら何を・・・」と思われるかとの感もあるのですが・・・。

水は高さより低きへ流れる。これは地形学の大前提。

わが国では、特に中部地方や関東地方を流れる川は、その上流地域で急峻な山地を流れ下る。北へ、南へ、そして東へ。谷を削り、埋め、瀬をつくり、太急ぎで海へ流れ出る川たち。

生徒たちに日本の地形の特色を学ばせるとき、まず白地図に主要な山や川を記入させる。川筋を描くのを見ていると、大概は河口から山地へ向かって描いている。

「まあそれでもいいのだけど、水は流れ下るのだからできればこう描く方がいいのよ」と源流から河口へと描いて見せると、「ええ・・・」という。何人か、源流部で川が交わっているものもある。

「水は低いほうへ、低いほうへと流れるのだから、日本海と太平洋へそれぞれ流れ出る川がこんなところで交わっているということはないのよ」と、このチャンスにと「分水嶺」という地理熟語を板書して説明したものだった。

ところが、ある時、愕然とさせられた。ギアナ高地からの流れが片やカリブ海へと北流するオリノコ川と、片やアマゾン川の支流ネグロ川へと南流するカシキアレ川とに分かれているのではないか。簡略に言えば、オリノコ川とアマゾン川がヴェネゼラ南部で繋がっている！・・・。ヴェネゼラからオリノコ川を遡ってアマゾニアへとその流域を通りぬけるツアーもあるとか。

でも、考えてみれば有り得ないことではない。まさに“水は低きへ流れる”で、常に大量に補給される水が枝分かれしてあちらとこちらに流れ下ることもあり得る訳なのだから。

一方、ドナウ川の源流部では、ラインとドナウとの流れが争奪しあい、かつてのドナウ流域が地面を削る力のより強いラインに奪われて、『ドナウ・源流域紀行』著者、堀淳一さんの表現を借りれば“領域”が変わっているという。

水は地表をのみ流れるのではなく、地中でも流れる方向を選択しながら“低きへ向かって”流れている。これも地形学の大前提。

ということで更に考えられるのは、地図で見て、中国青海省での黄河上流部と長江上流部とはさほど離れていない(1/1,400万縮尺図でバヤンカラ山脈という名の一つの山地を挟むのみのように読みとれる)が、ここでの地下水の関係はどうなっているのだろうか。TVでのドキュメンタリー『大黄河』に現れた黄河源流地域に広がっていた大小の点在する湖沼が想起させられる。

ヨーロッパには運河が多い。

その一つ、ミディ運河。そしてそれに繋がるガロンヌ運河。

ミディ運河は、17世紀に開通して地中海と大西洋とを結び、現在も活用されている。フランス南西部、地中海に流れ出るオード川に沿ってラングドックの野を数十のロックで緩やかに登り、サミットレベル(運河の最高レベル)を経て下り、ツウルーズでガロンヌ川と接続している。サミットレベルは192メー

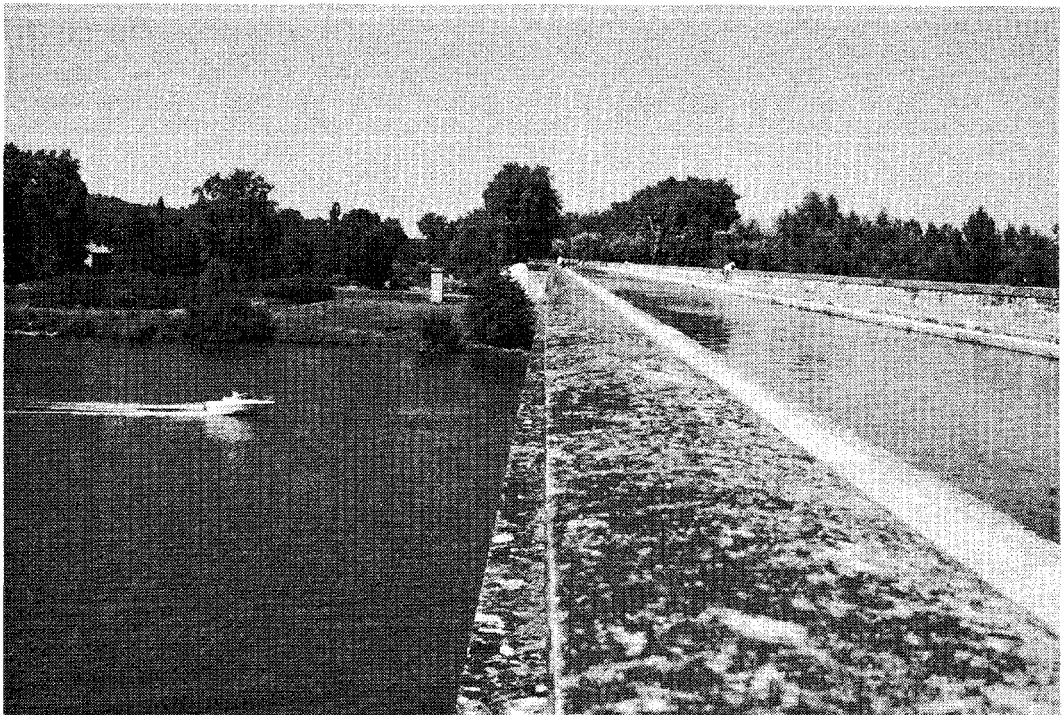
トルとさほど高くはないが、同方向に流れる川を結んでいるのではなくて分水嶺を越える運河であるから水の補給が必要である。この課題は東方約60キロ離れた水脈豊かなノワールの丘からの水路を引くことによって解決している。ツウルーズからボルドーへ、そして大西洋に向かうボートははじめガロンヌ川を通行していたが、この川の水位が不安定だったので「側設運河」・・・カナル=ラテラル=ア=ラ=ガロンヌ(通称ガロンヌ運河)がつくられた。

この運河はガロンヌ川の支流のいくつかの川と交差している。

その一つが写真のモアザックの運河橋。タルン川を越えている。

数年前の夏のある日、旧知の友人の若夫婦に案内されて我々老年夫婦がツウルーズからの半日の農村地帯ドライブを愉しみ、その途中で一休みしたところ。もっとありていにいうと、私がドライブ中に地図で見つけて寄ってもらったところ。

目の前を通り過ぎて橋を渡って行ったボートもあったが、運良く下のタルン川を遡るボートを捕らえることができたショットである。



ポンカナル(川を越える運河): モアザック郊外